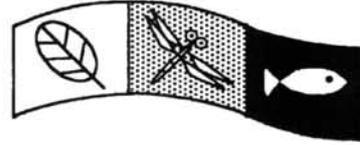


Rio



リオ ～豊田市矢作川研究所 月報～ No. 8



矢作川の中州で目撃されたニホンジカ (1998年11月12日 白金 晶子 撮影)



矢作川のさまざまな生き物

環境指標鳥 カワセミ



深見 弘

かれこれ10年近く前になりますが、豊田市の自然保全課の主催する「自然を訪ねる会」の案内役として田中 蕃先生と御一緒させていただき、藤沢小近くの山里を歩いて一日を楽しんだことがありました。先生からはいろいろなお話を聞かせていただいたばかりか、数日後、先生が学会や科学雑誌に発表された「蝶による環境評価の一方法」と「環境評価としてのチョウ」の二冊が送られてきて、又感激しました。私の鳥の調査、研究の参考にとのことでしたが、その内容の立派さに改めて感心しました。

さて、矢作川を代表する鳥の筆頭に私はカワセミを挙げたいと思います。上流部の清流域から河口部まで生息し、和名を翡翠と書くようにその光沢のあるコバルトブルーは“飛ぶ宝石”と言われ、多くのファンを

持っています。環境問題が叫ばれるようになり、カワセミを「環境指標鳥」と呼ぶようになってもう随分になります。確かに鳥としての環境指標性をたくさん持ち合わせています。田中 蕃先生の論文を参考に“環境指標としての適性”を整理して見ると、

1. その美しさが愛され、親しまれている。
 2. 特徴ある形態から種の識別も容易である。
 3. 研究者、同好者が多い。
 4. 環境要因と生活様式との結びつきが明らか。
- 等が挙げられます。

カワセミは水面から1～2m上の横枝や岩上から水中の小魚をねらい、ダイビングして捕え、主食として暮らしていますので、水の汚れによる魚の減少、透明度の悪化等は彼等が生存する上で大きな問題になってき



ます。とりわけ都市近郊では、工場や家庭からの排水により、川の汚染は深刻です。水質汚染のひどくなっ

た1960年代、カワセミは都市近郊から姿を消したと言われましたが、その後、住民の意識も上がり、水も少しずつきれいになって、カワセミも戻ってきています。



カワセミにとってもう一つ問題点があります。それは営巣に適した、土の露出した崖が少なくなったことです。カワセミは崖に横穴を掘って営巣します。最近、河川の護岸工事等に“近自然工法”をとり入れるようになったのは、カワセミにとっても朗報と言えましょう。以上のような視点から、私のライフワークとしてカワセミを“環境指標鳥”と位置付け、追跡調査をしたいと思ってきましたが、なかなかできず、今日に至っています。

(ふかみ ひろし、豊田野鳥友の会 会長)

河川管理の思想と矢作川ミニ経済圏

新見幾男

今は自動車の販売台数やら、大型店の売り上げ額やらの、大経済の動向のみを中心に経済が語られるが、ほんの数十年前まで、街にも村にも「ミニ経済」があった。

村で生産された野菜、果物、鶏の卵、時には穀物などまで、村の雑貨屋が買い取り、それを村人に供給していた。もう少し集荷や供給先の広い中規模経済も、もちろんあった。そういう多種多様な循環経済が重層的にあって、それが住民生活の日常の舞台だったと思う。

ミニ経済も中規模経済もすっかり衰え、大経済だけが元気づけたが、そこを大経済型の不況に襲われたから、生活がまるはだかにされたかのように住民は不安である。最近の「一村一品運動」などの村おこしは、特産品によって多様なミニ経済の復興をめざすものだと思う。

矢作川も一つの「ミニ経済圏」をつくっていた。古参格の農林

業の話は別にするが、旅館業、飲食業、雑貨業、竹材業、運送業、水産業などが相互に影響し合いながら繁盛していた。基軸は川魚の漁を中心にした水産業だった。今、ヤナ漁だけが観光化して繁盛を続けている。

矢作川ミニ経済圏が没落したのは、一般の経済原理だけによるものではなかった。河川の「水管理の思想」の歪曲、貧困化により、矢作川の自然環境が徹底破壊された。川の経済はもともと、今のことばでいえば「環境」に依存する経済だったから、被害は甚大だった。

矢作川に水がめ(ダム)がいくつもつくられた。矢作川の本流は、水がめにたまった「水量」を利用するための単なる「用水路」と位置付けられた。そういう河川管理の思想が、もう何十年も大手を振って歩いている。

川は、洪水と平水を繰り返し、自然に流れていなければ、自分の健康を保てない生命の集合体

である。川は自然に流れていなければ、川の生命を養えない。流れていてこそその川なのである。

河川管理の思想・技術体系を、「水量」確保一辺倒から「自然の流れ」を大事にする方向へ転換しなければならぬ。電力会社、農業、工業、都市は、天恵の矢作川を「水がめ」「用水路」として使わせてもらっているという思想で、河川環境の修復・保全のコスト負担をしなければならぬ。その環境コストを電気料金、用水料金に上乘せさせる「国民合意」は可能だと思われる。

(にいみい
くお、矢作
川漁業共同
組合専務理
事・豊田市
矢作川研究
所 事務局
長)



復権させたいハンノキ林の価値



田中 蕃

丘陵地から平地の水分に富んだ土壤には、ハンノキ林ができるのが普通の姿というのが、長年にわたって自然を見てきた私の感覚である。その感覚は、研究の対象であったチョウ類の中で、緑色の金属光沢を持つミドリシジミの幼虫期の食餌植物であったことから、念入りにハンノキ林の調査をした経験をともない、かなり強固である。

ハンノキの生育する土地には、大きな特色がある。ほとんど湿地といって良いほどの水分があること。そして、その水は速い流れをとまわず、ときには停滞している場合があること・・・などである。丘陵の谷戸、溜め池のほとり、湿地の内部または周辺、昔ながらの姿を止めたたんぼの周辺、傾斜の低い河川敷内の安定したワンド付近・・・等々。私たちの住む平地の自然の中で、ハンノキは原風景を構成する大変重要な樹木であったように思う。それだけ原風景には、水に関連する諸現象や風物が入り込んでいたのである。

なのに、私たちの身近で、ハンノキの名が話題にされる機会が少なくなった。川といえば、まずヤナギの仲間とヨシ（ツルヨシ）、ときにカワラハンノキの植物名がそれに続く。いずれも矢作川本流

のような、流れの速い川の河畔植物である。川の一部分であってもほとんど流れが感じられない所がある。そのような所では、まるで池沼みたいになっていて、河畔の植生とは異なった様相がある。ハンノキはその代表といえようか。30年くらい前まで、まだ未開発だった豊田市内のそこここで、ちょっとした山間の窪地や丘陵の縁の湧水地につづく湿地、改修されていない溜め池がたくさんあって、必ずハンノキが生えていた。畦にあったハンノキの並木は、水田地帯の風物詩のように感じられた。

こうした風景を丘陵地の宅地化や、大規模農地改良によってほぼ完全に破壊してしまったのである。

一般には植物遷移の木本の先駆種はアカマツ（低地や海岸ではクロマツ）であるが、低湿地の先駆種はハンノキといわれる。その先駆種のはびこる余地を奪った人為のあり方は、いったいどのように考えたら良いのだろうか。由緒あるハンノキの名すら、忘却のかなたに追いやる今はやりの雑木林の有名樹種や風土にそぐわない外来種の名前の氾濫。それが豊田の、いや広く日本の状況であることに、私たちはもっと深く心を寄せる必要があるのだろう。

祖先の知恵は、苦しい作業によって日本の食糧生産をひたすら支えた農耕の時代から、生きている。ハンノキは根瘤菌を養い、地味を肥えさせる効果が確認されている。これをうまく利用してきたのに衰退した歴史的経過



豊田市御船町小麦生のハンノキ林

は、今たんぼの中に生きた肥料としての薄紅色のレンゲソウの姿が見られなくなったことと時を一にしている。伝統と知恵を放棄していくのは、現代人の特徴なのだろうか。しかし、同じハンノキ属 *Alnus* のオオバヤシヤブシ、ヒメヤシヤブシは、崩れやすい花崗岩地帯の崩落防止のために、ニセア

カシア同様に根瘤菌による土地培養と緑地回復を目指して重用される。土木工事のためにはふんだんに使用するのに、農耕地帯からは排除する。これも効率優先のための人の知恵だろうが、どこかで何かが狂っているように思えてならない。

因みに、埼玉県ではミドリシジミを県のチョウに指定し、その繁殖地である渡良瀬川の河川敷に自生するハンノキ林は郷土の原風景としてセットで保護している。

(たなか ばん、豊田市矢作川研究所 主任研究員)

水時計 Mizudokei

水源林の予備調査

水源域の森林は、土壤中に雨水を一時貯留するため、洪水の調節や、濁水の緩和といった形で河川の水量を調整し、同時に水質を浄化する機能を持っています。このような水源涵養機能は、針葉樹林や広葉樹林といった違いなどによって変わることが分かっています。ですが、当研究所でも来年度から、今後どうすれば矢作川の水源林の水源涵養機能が高められるか、ということに関する基礎調査を開始します。まず手始めとして豊田市内の小河川の流域で、スギ林など源流部の代表的な森林の土壌の保水力・水質浄化能力を調べ、植生の種類や管理の違いによる差を比べます。もし皆さんが今後山中の小さな川で、調査用の杭や紐、網などが設置されているのを見かけたら、「ああ、生物や水の調査をしているところだ」と解釈して、立ち入らずにそっとしておいて下さい。どうぞよろしく願います。

広域圏フォーラム

11月8日に東加茂郡旭町の池嶋河川敷公園で豊田加茂広域圏主催による「地域づくりフォーラム・水の色は顔の色」が行われました。

京都大学生態研センター助教授の遊磨正秀氏が「水辺の生きものの子供の遊び」について滋賀県の親子三代に行った調査を基に、その時代の変遷そして意識の変化についてお話しされました。遊ぶ方法、遊ぶ環境が変化したということもさる事ながら、遊びという文化そのもの、すなわち子供自らで創造し、受け継がれてきたものが消滅しかかっていることをひしひしと感じさせられました。また俳優の八名信夫氏が芸能界の裏話など楽しい話を披露されました。

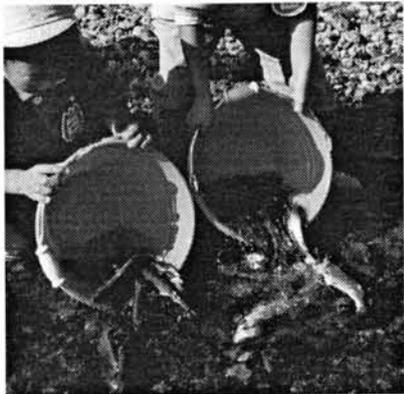
講演の後は、矢作川の瀬音をバックに、昔懐かしい麦とろろご飯や矢作川産のアユを食しながら、矢作川流域の未来についての熱い議論が繰り広げられました。

降海型アマゴ放流記

アユと並んで清流のシンボルとされるサツキマスは、秋に海へ下り、サツキの花が咲く5月頃遡上してくることからこの名前がついたと聞いています。

このサツキマスを矢作川へ少しでも呼び戻したいという思いから、豊田市農林課では昨年からのサツキマスの予備軍となる降海型アマゴ(シラメ)の放流を実施しています。

今年も去る11月12日(木)に、寿恵野保育園の年長組59名の子供たちにお手伝い頂き、渡刈町の葵大橋下右岸へ放流を実施しました。重量にして一〇〇kg、約一二〇〇尾、1尾あたりの体長は17〜18cmほどです。遡上して来た時に放流したものかどうか判別するため、背びれにオレンジ色のタグがつけられています。衣類の値札がついているプラスチックと言った方が分かりやすいかもしれません。来年5月に戻ってくれば、40cmにも成長した銀色に輝くその巨体を我々の前に見せてくれるはずですが、さて願いは通じるでしょうか。



もし来年、矢作川はもちろん県内の川でタグのついたサツキマスを発見・捕獲された方は是非一報下さい。(豊田市役所農林課 成瀬 〇五六五―三四―六六四〇)

編集後記

来月号はお休みいたします。来年2月に1・2月合併号を発行しますので、よろしくご了承ください。

表紙のニホンジカは水生昆虫の調査時に撮影したものです。中州の周辺で任意採集をしていたところ、ガサッともの音がしたので振り向くと、白いお尻がピョンと飛び去るのが見えました。その後、おそらくまだ若いそのシカはこちらにとっても興味があるらしく、表紙の写真のように、5mほど離れた場所でこちらをじーっと見ていました。でも、こんな中州では、洪水の時どうしているのでしょうか？少し心配な今日この頃です。(白)

*** ご意見、ご感想をお寄せください。 ***

発行：豊田市矢作川研究所 〒471-8501 愛知県豊田市西町3-60 豊田市役所 土木部河川課内
tel. 0565-31-1212 (内) 5320 fax. 0565-33-2460